

## 第4回（仮称）やまと芸術文化ホール基本構想検討委員会 会議録

会議名 (審議会等の名称)	第4回（仮称）やまと芸術文化ホール基本構想検討委員会	
開催日時	平成20年2月29日（金）午前10時05分～正午	
開催場所	保健福祉センター501会議室	
出席状況	検討委員	6名（小川委員、倉田委員、桑谷委員、西巻委員、古橋委員、米屋委員）
	アドバイザー	（株）シアターワークショップ 伊東氏ほか1名
	事務局 （担当課）	3名（企画政策課長ほか2名） 企画部 企画政策課 総合政策担当 （内線 5304）
	傍聴人数	1名
<p>1．会議次第</p> <p>（1）市民アンケートの結果について（最終報告）</p> <p>（2）提言書に関する議論</p> <p>（3）その他</p> <p>2．議事要旨</p> <p>（1）市民アンケートの結果について（最終報告）</p> <p style="padding-left: 2em;">アドバイザーより資料1「（仮称）やまと芸術文化ホールに関する市民アンケート調査 集計結果（最終報告）」説明。</p> <p style="padding-left: 2em;">委員長：アンケートの結果について、何かご意見、ご質問はないか。</p> <p style="padding-left: 2em;">委員：自由回答を分析する中で、特徴的だった点はどこか。</p> <p style="padding-left: 2em;">アドバイザー：立地に関する要望が多かったが、その中でも駅からのアクセスに関する要望が非常に多く、「駅から何分以内」といった具体的な記述が多かった。他都市だと、車でのアクセスへの要望が多い傾向がみられる。</p> <p style="padding-left: 2em;">委員：一時期、十分な劇場機能に配慮し広大な土地を求めたことから、郊外型のホールが増えた。バックスペースも十分に確保でき、機能的には良かったのかもしれないが、ホール近隣には何もなかったため、来場者は鑑賞後の感想を語ったりする余裕がないまま、すぐに日常に帰らなければならなかった。そのため、観たことを話題にもしない時代が続いた。その反省から、劇場が都内・市内に回帰してきたと感じている。最近、東京では小劇場の良さが見直されているが、土地の大きさも関係してのことだと思うが小劇場型の施設が多く建てられている。劇場以外に大学も、一時期郊外に出たが都心に戻ってきている。先日新聞でも話題になっていたが、近年車のあり方が変わってきている。若者が車離れをしていて、車の必要性を求めているという記事が出ていた。昔は「車がかっこいい」という時代背景があったが、今の若い人の価値観は変わってきている。そういった背景も考えると、立地条件として駅に近いことを求めるのは、非常によくわかる。将来的にどうなるかわからないが、理があると感じている。</p>		

- 委員長：大和市の地形を見ると、南北に細長く、そこを上手に鉄道がつないでいる印象を受ける。そうすると、市内の若い人から高齢者までをカバーするアクセス方法として、鉄道が最も便利といえる。当然かもしれないが、こういう結果が出るのも頷ける。
- 委員：多くの地方都市では、車中心の生活になったことで郊外に商業の中心が移り、市内がシャッター通りになることの懸念が以前から言われている。公立劇場のもその一端を担っていたのではないか。
- 委員長：まちが元気になるためにも、こういった文化施設が駅に近いところにあるのは、良いことなのではないかと個人的には感じる。芝居を観たら、その後で食事をしたり、芝居の余韻を楽しんだりするということも、重要である。生活の中に文化活動を位置づける、というライフスタイルを考えたときにも、自然な感じがする。
- 委員：反対意見を見ると「箱物反対」という意見が目につく。劇場は“クローズド”の状態の中で何かが行われていて、そこへ入っていかないと何をやっているか見えないという感覚を持つのもかもしれない。逆に要望等の意見を見ていくと「緑に囲まれた環境がある場所」や、「複合でレストランがついていて欲しい」など、施設が開かれることへの要望が多い。劇場の中で何が行われるのかは抜きにして、“オープンな劇場”というイメージを重要視しているように感じられる。前回「夜公演が多いので、緑があっても見られない」といった議論もあったが、最近は昼公演も多い。劇場のエリア自体が憩いの場所である。アンケートでは展示室への意見が多かったが、だからといって安易に展示室を設置するのではなく、まずはオープンな場であることが大事なのではないか。とにかく行けばお茶が飲めたり、DVDが流れていたり、その日は公演が何も観なかったとしても、「次の日曜には何かやっているから見に行こう」といった気持ちになれば良いのではないか。
- 委員：やはり「箱物反対」といった回答が目についた。「ホールを建てる＝ハコモノ」というよくある意見ではあるが、これを丁寧に払拭していく必要がある。ホールを建てることは、劇場やアートに日常的に触れられるというライフスタイルの提案であり、民間では出来ないからこそ、行政が行うということである。暮らしの中に芸術があることが大切なのではないか。芸術に触れるのは必ずしも「何千円もするチケットを買う」ということではない。最近は昼の「ワンコインコンサート」を実施しているホールもある。このように、様々なチャンネルで芸術に触れられることが大切である。芸術文化ホール建設を前提に検討していると思われるのは本意ではない。“ソフト先行型”というか、何を变えていこうとしているのか、事業単位で理解を広めていくことが重要だと感じた。
- 委員：全体的に、バランスのいい回答という印象を受けた。賛成の人も過度な期待をせず、反対の人も理にかなった意見を出されている。我々は検討を通して、芸術文化ホールは市民が新しいアートに触れて、新しい生活環境をシェアしていく、その拠点というイメージを持っている。ハコありきではなく、そういった“場”を提案していくことが必要である。そのプランニングのためには、建設後にお金がどれくらいかかるのかを提示していかなければならないと感じる。また、その“場”がまちに新たな魅力を付与し、市民生活の新たな魅力を創出するということを考えていることを示していくことが、我々にとっても重要である。「ホール＝ハコモノ」というイメージがバブルの頃についてしまったが、それをどう払拭していくことを具現化していかななくてはならない課題である。
- 委員：やはり反対意見が気になってしまう。「レストラン」と「ホール以外の他の機能」という要望が多いが、これらは一見、集客装置になるようだが、実際はなっていない。私が

運営に関わる劇場にはイタリアンレストランが入っていて、質も価格も適当で、ランチタイムは賑わっている。ただし、夜は全くお客さんが入らない。夜のメニューはコース料理のみで、質と価格は悪くないが、近隣が住宅地のため、飲食のために外出する場所ではない。近くにレストランはないが、それでも夜はお客さんが入らない状況である。最終的には、「芸術文化」が外せない重要な要素となる。“売り”がホールであることを硬派に貫かなければならない。常に公演をしているわけではないので、何も無いときにどう人を呼ぶかが重要である。先ほどの意見にあった、DVDを流すといった工夫が必要になる。アンケートには「渋滞は困るから、ホール建設をやめてほしい」という意見があったが、むしろ渋滞するほどの施設が作りたいくらいである。商業施設から学ぶ点も多いが、あれは複合だから良いのではないか。やはり、ホールはきちんとして作り、別の機能を複合させるとしても、ホールと関連した機能として位置づける必要がある。

委員：基本的に劇場は「公演があるときにだけ開館して、それ以外の時間帯は施設全体を閉じていてもよかった」。それが劇場本来の役割であった。しかし、劇場は広場であるという考え方が広まるにつれ、ただ芝居等を観にくる場所ではなくなってきた。なぜこのような考え方になってきたかという、賑わい＝観客育成という視点から、劇場は一部の芸術愛好家のものではないという考え方になってきた。今後「なぜ今、大和市にホールが必要なのか」といった議論になることが予想される。そのときに、「図書館や学校があるのに、何故劇場が必要ないのだろうか」と言えるのでは。劇場が「隣の市にあるから必要ない」ということであれば、図書館も「隣の市にあるから必要ない」ということになる。隣の市で税金を投入して施設を運営している。「そこに行けばいい」というならば、大和市はその分、隣の市に何を提供できるのか。“相互連携”というのであれば、こちらにも提供できるものがなければ連携はできない。劇場を作るのが「公共事業」とするのなら、郊外にあまり使われない道路を作るより、まちなかに劇場を作ったほうが持続する経済効果がある。そういう意味で、劇場は公共事業としていかに採算性が取れるものかということ、積極的に理解を求めべきではないか。図書館や美術館が認知され、劇場が認知されない理由はそこにある。短絡的な収益重視の意見には、シビアに反論していくべきである。

委員：国立劇場も国の予算だけで運営できているわけではない。助成金やチケット売上がなければ運営できない。これは、そのコンセプトも含め、すべてバランスの問題である。先ほど話題に上がったレストランに関して言えば、千駄ヶ谷の国立能楽堂のレストランは人気が高い。以前は客足も悪く、「企業努力が足りない」という議論があり、現在は民間に委託している。施設そのものの“オープン化”を目指して企業努力をした。レストランは価格帯を下げたり、ランチを提供したりすることで、日常的に賑わうようになった。能楽堂の雰囲気そのものに魅力があるので、次第に人気が出るようになり、周辺の飲食店からは「民業圧迫ではないか」というクレームが来るようになったほどである。これもひとつの“オープン化”の例である。市民の日常生活の中に文化芸術があるライフスタイルが形成されるような要素を持つことがとても重要である。その上で、“コア”としてのホールをどのようにするか、という議論が必要になる。アンケートの回答をジャンル別でみると、音楽関連の設備や事業の充実への要望が多い。ダンスやミュージカルを演劇に含めて考えたとしても、音楽がより多い。また、施設の性格としても鑑賞型への要望が非常に多かった。確かに、20万人以上の人口の中で、どんなに文化活動が活発だったとしても、そのパーセンテージは小さい。活動に取り組む以外の方々は鑑賞

が主体である。施設計画の資料に「大ホール、小ホール、創作支援機能」とあるが、「鑑賞型のホール」と「発表・創作の場としてホール」をそれぞれどう考えるかという意図で発言をしていた。例えば、800席というキャパシティをひとつのラインにしたときに、整合性を考える必要がある。単純に足りるのか足りないのか、興行として借りてくれるかという問題もある。つまり、質の良い公演が行われるかどうか。そういうことも含めながら鑑賞型のキャパシティをどうするかを考える必要がある。それから、発表の場としどの程度の席数・広さが適正なのか。そして、2つのホールの将来像はどのような姿なのかを考える必要がある。

委員：ベルリンの壁崩壊後に、ある仕事でベルリン・パリ・ドレスデンなどの芸術団の長や文化大臣らにヒアリングに行ったことがある。ベルリンの壁崩壊後の経済混乱期に失業者率が2桁台に達したにも関わらず、ベルリンでもパリでも文化予算が増えたことについての調査だった。ヒアリングした相手の方々は皆、「劇場を持つことはもちろん、芸術文化は都市機能の一つとして欠かせない」ということが前提にあるとお話をされていた。パリやベルリンで語られたのは、都市というものは経済的・社会的に成り立っていれば良いということではない。何十年、何百年経ったときに、90年代のパリあるいはベルリンという街が何だったのかを説明できなければならない。それを説明できるのが、芸術文化を中心とした側面での、人間の営みである。皆、その時代の、そのまちがどうだったのか、何だったのかを検証していくために、時代が大きな転換点であるいまこそ、芸術文化への予算を増やすべきだ。それがパリやベルリンとしての誇りや歴史を作ってきた、といった明快な理論を持ち、異口同音にそう仰られていた。

施設の建設に、多くの自治体と同じように取り組んでも、そのことに対する批判は燻り続ける。だからこそ、市民に「大和市に住んでよかった」と思ってもらうために、大和市が何に取り組んでいくかが問われている。新たな「まちの魅力と機能」を創出していくのだという意味が根幹になくてはならない。建設に際して、そうしたヴィジョンを持つことが重要であり、もしそれがあれば、適切な説明の方法はいくらでもあるのではないか。そのことが、まさに今問われている。私自身、公共ホールと民間ホールを経験してきて感じるのは、「市民・お客様が来る」ということのためには、「アートの営みに参加する参加者やお客様を創る」作業を我々がすることが大事だということである。この環境づくりは地域の状況の中で、オーダーメイドで創っていかなければならないものである。放っておいては、お客様は増えない。活動としてはこのことが非常に重要であり、その点を理解して取り組んでいくことを、宣言していかなければならない。

委員長：皆さんと同じ印象ではあるが、やはり反対意見が気になった。中には、「市民生活が苦しい状況下で、税金をそんなところに使うのはいかがか」という意見もある。世界を見ても、貧しいところに文化がないわけではない。どんなところでも、文化的な活動が大事なはずである。しかしながら、「文化＝ハコ」と短絡的に捉えられていることが、意見の中に感じ取れる。そのギャップをどう埋めるかが大事である。まずは、文化が生活の中で、非常に不可欠なものだということが理解されている必要がある。「文化の薫る街づくり」という言葉がよくあらゆる自治体の総合計画で使われるが、実態のない、イメージしにくいものである場合が多い。そういった計画の中では、文化は耳障りの良い言葉でしかない。その実現＝ハコをつくることという固定観念があるのではないだろうか。まずは、行政レベルで文化をどう捉えて取り組んでいくかを示さなければならない。ある意味で文化も“インフラ”で、非常に大事なことである。そのように皆さんに理解

していただけるように、持っている固定観念を変えて、理解していただくように取り組まなければ、ここでの議論が無駄になってしまう。市民の皆さんにとって身近なテーマとして「文化が何か」ということ、また、そういった施設を我々が考えているのだということを説明していかなければならない。「ハコモノ」への拒否反応は非常に強く、真摯に取り組まなければ、払拭できないのではないかと。また、“施設”というと、形がすぐにイメージされてしまうが、そういったものではなく、広場のようなものであるべきだと考えている。実際に、ヨーロッパなどを見ていると、広場で市民の色々な活動が行われる。そして、レベルの高いものを提供していくということが、結果的な姿として現れる。まずは、広場的な感覚の施設を文化のフィルターを通してつくっていくことが大事である。知らなかった、レベルの高い文化・芸術に触れることができれば、市民の皆さんにも受け入れられやすい。広場の持っている機能を介して交流が成り立ち、更に文化を介して、様々な人達に触れ合えることが重要で、それがインフラになっていく。その点をこの構想の中で明示していかなければならない。構想の中だけでは述べきれない点については、文化振興計画などを策定していかなければならない。構想の実現は難しい。もう少し議論を深めないと、我々の中で共有できたとしても、第三者の説得は難しい。共通の言葉がないように感じる。

委員：当初から、市民のたまり場になるというイメージをしていたと思うが、アンケートで求められていたのは、オープンな場として、開かれているというイメージの施設であった。一人ひとりバラバラの「個」「孤」としての市民が集まってきて、「集う・憩う場」であることが大事なのではないだろうか。そして、そこには文化政策がしっかりしなければならないということと、長期的な展望が必要である。30年前までは「車が良い」と言われていたのに、今は「エコが良い」と言われている。半世紀でどれだけ変わるのか、長い目でみられることが重要である。先ほどの“ハコモノ”の議論にも通じるが、建設、経済、ハードが結びついた結果が重要なわけではない。文化やライフスタイルや市民生活が10年後、20年後と変わっていく中で、ホールがどうなるのかをイメージできる構想をつくっていく必要がある。“ハコ”はそれに付随する問題である。コンセプトが広く、長く、また大きく捉えられることが重要である。

委員：自由回答の利用料金への意見が気に掛かった。「アマチュアには安く」「市民には安く」という要望が理解できる一方で、劇場施設は機能が優れていればいるほど、安全管理のために専門家を配置しなければならない。ところが、一般の方にはその認識がない。立派な芸術監督を置いている素敵なホールとして評判のところでも、地方都市であればカラオケ大会などのイベントに貸すことも避けられない。例えば、幼稚園の学芸会への要望があったときに、幼稚園児を舞台に上げるためにはケアが必要で、そのための人件費がどれだけ掛かるかを一般の方は想定していらっしゃらない。そのため、利用の都度その説明をしなければならない。本当に安く借りたいなら、危険がなく、管理者がいなくても良い程度の設備のところでは発表すれば良いはずである。そういった利用の“仕分け”を考えていかなければならない。一般の方の劇場のイメージとして、劇場・ホールは興行の場所で、チケット収入があり、利用料金を取り、採算が取れる場所だと思っているようであるが、ある意味では生涯学習機関で、享受者の直接負担だけでは成り立たない。そこに更に福祉的サービスまで期待されるようになっていく。直接享受者が払う料金だけで成り立つという誤解から解いていかなければならない。先日大阪府の施設について話題になっていたが、博物館・資料館は赤字で当然である。それがいけないことである

という考え方が、まだ蔓延している。チケット収入のみで施設を賄うことは出来ないということを伝えていかないと、理解は得られない。

委員長：最近では施設づくりも市民参加で取り組み、それが当たり前になっている時代である。市民が運営に参画していくことも大事だが、その延長として、プロが要らなくなってしまうということが、文化施設に限らず様々な局面で起きている。理解されていない、危うさも感じている。市民が参画すれば、コストが掛からないような施設づくりが出来ると誤解がされている。民営化に関しても同様である。「民営化すれば解決するけれど、それで失われることもある」という議論が欠落している。“パブリック”という概念をもう一度問い直す必要がある。そこに市民の税金を使う意味を、市民に理解してもらわなければいけない。

## (2) 提言書に関する議論

アドバイザーから「(仮称)やまと芸術文化ホール基本構想・施設計画(資料2)」「施設計画の基本方針検討資料(参考資料)」について説明。

### 質疑

委員：これまでの意見が盛り込まれていて、良い案になっている。今後の検討に向けた問題提起をひとつしておきたい。それは、多目的ホールと舞台技術との関連である。これは、避けて通れない問題であると考えている。以前、「可能な限りの高度な舞台技術を付加してほしい」という意見が議事録にあり、訂正させて頂いたが、「多様な要望に耐えうる技術を可能な限り用意する」というのが正確な意図である。建設費の問題にも配慮し、可能な限りと申し上げた。多目的ホールでは、音楽系の公演時には反射板が設置され、演劇公演時には反射板が消える。これは求める残響が全く違うからである。先ほど、可能な限りの技術を導入するという表現をしたが、以前は「高度な技術を使って多目的ホールを実現する」と考えていたが、それは違うかもしれないと考えた。将来的なことを考えても、さほど高度な技術を使うことなく、演劇においてもコンサートにおいても、両方の目的を実現しうるホールが考えられるのではないかと思い始めた。イメージにあるのは、「木」を利用したホールである。ブラックボックスで、昔の倉庫を改造したような小劇場ではダメで、木造で、音がやわらかく反響するホールなのではないか。新国立のオペラ劇場はバイオリンの中にいるような感じで、やわらかく聞こえる。新国立は残響が1.6秒程度である。その空間が小さくなり、しかも演劇にも対応できる、という可能性はないだろうか。必要な電気音響設備は備えるが、自然な雰囲気ホールがそろそろ出来てもいいのではないか、と思う。多目的な用途を実現しながら、技術的には自然で、コスト減になりうるようなホールをつくれないうか。

委員：先ほど、能楽堂のレストランの話題があったが、能楽堂が異空間だから流行っていると言える。レストランから能舞台が見えたらもっと流行る。昼に訪れたら、夜は何をやっているか見てみたくて、来たりすることがある。そのように、劇場をより開かれた、より身近なものにする工夫はまだまだ出来る。極端な提案かもしれないが、小ホールそのものが、普段はレストランということも可能なのではないか。ホールの中にテーブルがあって、ランチが出てくるぐらいの開かれ方があって良いのではないだろうか。開かれる部分は、計画上ロビーに集約してしまうが、もう一步踏み込んで施設を開く方法はないかと考えていた。資料中の事例の中でも、北上はある意味ショックであり、意表を突かれた。練習室が全部ガラス張りでは何をやっているかが見える。コンセプトが徹底

して面白かった。最終的には、メインホールの設定が、どうなるかがポイントである。先ほどの意見は結局、建築的なアイデアの話である。先ほどのホールの機能の話題はもう“絵”が見えるような具体的な話で、そこまで出来るかは別の問題である。ただ、ホールを身近に、魅力的な空間にするための方法として、可能性はあると感じている。先日たまたま新しく出来るホールを見に行った。完全平土間の空間に舞台が組み、座席は3,000席取り外しが可能で、20m×40mの舞台もすべて手動で、まったく機械的なものがなかった。会場を組むために要するのは一晩である。「人さえいれば何でも出来るから、機械は要らない」と施主から指示を受けたとのことであった。もう一度、“人の力を信じるホール”は、ソフトウェアとも絡むが、新しいタイプの市民参加型ホールとなる可能性があると感じる。

委員：以前、行政に対して劇場運営に関する質問を20項目ほど書いたことがある。「税収の何パーセントを施設に使うのが良いと考えているか」とか、「採算性を考えるときに、どれぐらいのパーセンテージで『採算が取れている』と捉えるか」とか、そういったことを投げかけた。今度は逆に、それを市民に投げかけたらどうなるのだろうかと考えた。採算性を上げるならチケット代や施設利用料金を高くすれば済む。そうすれば、持てる者と持たざる者との格差が出る。また、質は問わず観客動員だけを目指す。果たして、それは公立劇場の目指すべきことなのかという疑問が残る。分かりやすくいうなら民放とNHKの違いではないだろうか。管理運営費は、チケット収入と施設利用料のみでは、とても賄いきれるものではない。このことを逆に尋ねてみたら、批判型ではなく、提案型の答えが返ってくるのではないかと期待したい。アンケートで賛成・反対だけではない、そういう問いかけ方があるのではないだろうか。「地域における公立劇場の役割」をテーマにしたシンポジウムを行う場合があるが、逆に、「市民が公立劇場に果たす役割とは何か」といった投げかけがあってもいい。一度、逆に市民の側から公立ホールに対する逆提案をしてもらわないと、堂々巡りをするのはないかという気がする。

委員：杉並公会堂は新日本フィルとフランチャイズ契約を結んでいる。杉並公会堂との関係を前提に、建設に先駆けて様々なプロジェクトを始めた。計画が発表された当初は、杉並区が特定のオーケストラを優遇することへの批判があったが、建設以前から学校へのアウトリーチを何年か重ねていくと、5年ほどで反対意見が消えていった。地域の中で音楽家が活動することが浸透し、「オーケストラに任せてもいいのではないか」という認識が持たれるようになった。これは「地域に何をもちたしてくるか」という実績の積み重ねの中でしか、感じてもらえないのではないかと感じた。「維持費がいくらで、チケット収入がいくらで…」ということではない“外部効果”を示していかなければ、理解が得られないのではないかと。

委員長：荻窪では地元商店街がオーケストラをどう支援するか、日常の話題として取り組んでいた。そういう存在になっていることはすばらしい。

委員：公立劇場が評価される運営や事業をしていたら、市民は「ハコモノ」行政と反対しない。「私は観に行かないが応援している」といってくれる。現実にそういう現場にいたので、痛切に感じている。

委員：今後の検討を進める上で、候補地の地形のわかる図面が欲しい。

事務局：現段階では候補地として位置づけのある場所が未定なのでお示しできない。今後、可能性の範囲でお示しできればと考えている。

委員長：大事なキーワードとして“ミドルアップ”が出てきているが、これについては、多少皆さんの捉え方の個人差やご意見があると思うが、いかがか。

委員：資料中の「ホールコンシェルジュ」は市民から何が出てくるかを引き出す意味でインストラクター的な可能性があるかもしれない。その人自身が展望を持っていて、インストラクターをしながら、市民を引き上げ、問いかけていくことは役割として大事なのではないか。

委員：どんなジャンルでも、また少人数でも良いので、アーティストそのものやアーツカンパニーをフランチャイズやレジデントとしていてくれたら、「このアーティストがいるからこれが出来る」という具体的なビジョンが持てる。それが無い中で取り組み方を考えていくのは難しい。具体的に活動できるアーティストが、常駐に近い感じで本施設にいられることを想定したい。

委員：杉並は「杉並少年少女合唱団」という下敷きがあり、更に日フィルの取り組みによって拡大していった。ある年代以上は「杉並公会堂＝杉並少年少女合唱団」という印象が強く、公演に通った経験を持つ人も多く、ある種のブランド価値を持っていた。まちで支える合唱団、という意識だった。

委員：戦後六十年が過ぎて、これから日本の芸術、世界の芸術がどうなっていくかを考える必要がある。これから、アーツマネジメントに関わる人が発言をしていくことで、公立劇場のあるべき形、目指す方向が見えてくるのではないか。

委員：“集客性”とよく言われるが、世代の興味が変わってきていて、昔なら集客できたものが、今では集客出来なくなっている。セグメント化され、多様になっている。アーツマネジメントのように、営利ではなく行われるものは、観客を創る、気づかせる、育てることが必要である。極端な言い方をすれば、アーティスト＝有名人である必要は全くない。本施設は、あるアートに触れたときに、「あなたにとってこれは何でしたか？」と問いかける場であれば充分である。興行的には「旬な人は誰、著名な人は誰」ということを知る先端性が求められるが、「多様な受け止め方」を求められるのが芸術機関である。一人ひとりに問いかけるから手間が掛かるが、それだけ細やかなアプローチが必要である。そして「アーティストが必要だ」というときに、そのアーティストをフォローするには制作が必要で、そこではやはり“人”が重要なのである。

委員：資料中の「劇場を最適な状態で運営できる専門人材の配置」は本当に重要なことである。何かを形にしていくには、顔の見えるアーティストを置くことも大切だが、アーティストックディレクターに権限と責任を与えることが成否の鍵を握っている。プログラムの決定などを合議制で成り立たせている公共ホールが多いが、そこには弊害もある。作品を創るときには、ある人が主導して引っ張っていかなければならないところが大きい。そのシステムを保障してあげることが“2010年型のホール”がうまく機動していくためには重要である。世界の中で成功しているホール・劇場をみると、これはどこもやっているシステムである。アーティストックディレクターに必要十分な権限と責任を与えることが重要である。「アートコンシェルジュ」などが成り立っていくためには、ここに重要なキーがある。「三位一体の運営」がキーワードになる。資料で提示されている「ミドルアップ」は、言い換えれば「プロの育成」であるが、近年、何事にも「プロ」が必要であるにもかかわらず、プロが軽視されている風潮がある。「プロの重要性」を尊重することが重要だと考えている。日本のアートの大きな問題は、少し取り組めば、すぐプロだと言える、つまり「自称プロ」が余りに多いことである。そして、外から見

ると、何がプロで、何がプロでないのかがわかりにくいことが一番の問題である。これだけ多様なコンテンツがある日本という国において、舞台芸術系が面白くないと言われる要因は、“つまらないもの”を見せられてる機会があまりにも多いという事実を忘れてはならない。“セミプロ”が多いことは底上げとして非常に良いが、スポーツを見ても、“プロ”とは限られた、選ばれた人たちである。“セミプロ”までが“プロ”と言われているあいまいさを整理しなければ、“2010年型”とは言えないと感じている。

委員長：毎回議論がなかなか集約できないが、まだ今後も議論の時間があるので、本日は終了としたい。

#### (4) その他

第5回目の日程が3月21日(金)午前10時～午後12時で了承された。

#### 3. 委員会資料

資料1「(仮称)やまと芸術文化ホールに関する市民アンケート調査 集計結果(最終報告)」

資料2「(仮称)やまと芸術文化ホール 基本構想・施設計画」

参考資料「施設計画の基本方針参考資料」